

---

# 東方反幻想

While(1)

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方反幻想

### 【ΖΖコード】

Z3038BA

### 【作者名】

While (1)

### 【あらすじ】

なんか、みんなが寄つてくる。悪い気はしないが、不思議ではある。

何の魅力もない、といったら嘘になるかもしねーいが、みんなが惹かれるような魅力を、私は持ち合わせていない。

本当、どうしてみんな私に興味を示すんだろうか。

## 春先の雪（前書き）

本作品は、東方projectに登場するキャラクターがことじごとく性転換しています。嫌悪感を抱かれる方はブラウザバックを。

## 春先の雪

眩い朝の陽ざしを受けながら微睡んでいると、ゆさゆさと体を揺さぶられる。

眠りを阻害しようとしているそれは、しかし一定のリズムを刻んでいるため私をより深い眠りへと誘っていく。

「…………おさ…………」

おぼろげに聞こえてくるのは同居人の声。きっと、ムスッとしないのだろう。

「……あと、もうちょっと……」

「……人形がどうかしたのか？」

と、首をかしげながらいたのは、紅白の御子服に身を包んだ同居人。真冬だというのに、夏と来ているものが変わらないとははどういうことだ。

「シャンハイ！」

日本海の向こうにある大国の都市名を叫びながら飛び起きる。すぐさま目標の位置を特定し、できる限りの速さで取り返す。

「…………人形がどうかしたのか？」

と、首をかしげながらいたのは、紅白の御子服に身を包んだ同居人。真冬だというのに、夏と来ているものが変わらないとはどういうことだ。

シャンハイと聞いて思い浮かべるのものが人形とは……。確かに、そんな名前の人形いたけどさ。

「うー…………別になんでもないよ」

いいながら、先ほど奪つたもの……布団に包まるが、布団は生ぬるく不快な温度となつていた。

さつきまでの暖かさがまるで嘘みたいだ。

「それで、まだ朝なのになんで起こしたのさ」

「もう朝だけどな。今から異変解決に出るから、留守番してて」

「……ああ、やつと気づいたの」

ちなみに今は春先である。しかし外は雪が降っている。紛れもなく異変である。

気づいてたならいってくればよかつたのに。なんて愚痴る同居人を余所に、タンスから防寒具 去年作成した手編みのマフラーを取り出し、首につけてやる。

「風邪ひかないようにな。行つて、いらっしゃい」

欠伸を噛み殺しながら手を振る。

「お、おつ……」

同居人は顔をうつすら赤く染め、それを隠すように踵を返す。結構な速度で飛び去つていく後姿を見届けてから、開けっ放しにしてあるタンスに向かう。

「着替えて、朝ご飯でも食べよ

作つてあるのかどうかしらないのでが。

同居人が作つておいてくれたご飯を食べ終えてから、手袋をつけて縁側から外に出る。

足袋が濡れないように足の高に下駄を履き、黒の番傘を肩にかけてしゃがみこむ。

見事な積雪。純白のそれは穢れがなく、砂糖をかけて食べればおいしいしそうだ。塩は冷たくなるから却下。

「さすがに食べないけど」

冬に冷たいものを食べる。それはそれで風情があるけれども、さすがに雪を食べようとは思わない。お腹こわすし。眺めているだけではなんなので、小さめのだるまを作つてみる。顔のないだるま。

頭が大きかつたり、絶妙な大きさだったりするのはほんの愛嬌。暇つぶしなんだから適当である。

「なにやつてるんだ？」

不意に上から声が降り注ぐ。見上げると、番傘が邪魔をして声の主が見えない。見えているのは下半身くらい。

雪で少しだけ重くなつた番傘を振り、立ち上がると、そこには杖を手にした友人の姿が。

「おはよう。満坤」

まぶしいイケメンスマイルを向けられる。金髪が光を反射し、より一層その笑顔を引き立たせているような気がする。

幻想郷にはたくさん美形がいるものの、こじつはなんというか、軽薄そうな美形だ。女遊びが酷そう。

ま、偏見なのだが。そもそもこじつは今まで異性と交際をしたことがないだらうし。実際初心だし。

「……あんまりそつちの名前で呼ばないでほしいな……」

苦言を呈すと、そいつ……霧雨真理沙はそつかい、と気にした様子もなく縁側に腰掛ける。

「零無は？」

「異変解決に行つたよ」

教えると、少しだけ田を見開いてニヤリと笑う。

「つまり、一人つきりつてわけだ」

まあ、そうだ。しかしそれがどうかしたのだろうか。恋人同士ならやることやるのだろうが、私と真理沙は生憎としついた関係ではない。

暇なら異変解決に行つてこればいいのに。

「別に、暇つてわけじゃないさ。異変解決の方も行つてみるつもりだし。夜月の顔を見に来ただけさ」

「そり、ならさつせと行つてきなよ

「……それ、さすがに酷くないか？」

そうかもしけない。が、意味が分からぬことをいう輩にはこれでいいのだ。

「意味が分からぬって……」

がつくつと肩を落とす真理沙。そういうことは霖さんでいえばいいのに。

どうして私なんかにいつのだか。それがわからないよ。

「待て。そこでどうして霖が出てくる」

「別に～？」

いつてやると、真理沙は顔をほんのり朱に染める。真理沙が霖さんに好意を抱いていることくらいお見通しなのだよ。もつとも、その行為は親に向けるようなものなんだらうけど。もういい、とにかくやする私から田をそらすと杖にまたがりゅうくつと宙に浮き始める。

「帰ってきたら暖かいものくらいは作ってあげるよ」驚いた表情を向けられる。……別に、異変解決に尽力したことを見つだけなんだけど。そんなにおかしいことかな。「いやおかしくないが……。なんといつか、波があるな」「波？」

「気分の波」

ああ、うん。たしかにそれはあるかもしれない。気分の波が一定じゃないってことだよね。わかりやすくいうと情緒不安定。「まあいいや。それより、さっきのことは本当だな？」

「うん。スーパーくらいなら」

忘れるなよ。そう言い残して真理沙は飛んで行った。なんといつか……ちゅうこ。

「こんにちは」

引き続き雪遊びをしていると、執事が現れた。

銀髪である。銀髪。幻想郷において金髪は珍しくないが、銀髪といつのは珍しい気がする。

「こんにちは。どうしたんです？」

聞くと、執事……十六夜朔夜は私に近づき、背中と太もものあたりに手をやるとお姫様抱っこをする。

「すげー。執事すげー。何がすげーって手馴れてるとこが凄いよ、うん。

「動じないんですね」

「え？ あ、はい。そういう気分じゃないですもん。とにかくで、仕事ですか？」

敬語を使つていらぬあたり、仕事なんだわ。わがままお坊ちゃんの「ご命令」。

「はー。レミリア様があなたを連れて來い」と  
レミリアか。自分でこればいいのに。まあ、完全に日の光がないというわけじゃないから、出不精のあいつせられ幸いと執事に命令したのだろう。

私は留守番があるんだけどなー……。いつたといいで意味はない、か。

「じゃあ、行きましょうか。あ、番傘取つてください」

そこまでいふと、一瞬にして景色が変わる。神社とは打つて変わり、そこには紅い館があった。

朔夜に下りしてもらい、そのまま番傘を受け取る。

「それでは、ご案内します」

歩き出す朔夜の後ろを追いかける。さて、我儘ぼつちやんは何の用かな？

## トランプ

「それで、何をするの？」

そういつたのは、私ではなく私の膝に座る金髪の少年。おかしな形をした七色の羽を嬉しそうに動かしながら、目の前の兄に語りかけている。

「……フラン。お前はもう少し礼儀をだな」

「あーあー、きーーーえーなーいー」

しかめつ面をしていう少年の兄、レミリア・スカーレット。色素の薄い髪を揺らし、盛大にため息を吐くとこちらに頭を下げる。

「すまんな」

「別に。それより、無理やり呼び出してもおじいちゃんがそこなのかと突っ込みたいね」

子供のやることなど珍にしないわ。実年齢は私の数百倍なのが。

「二人だけで会話するなー！」

「ああはいはい。わかつたから暴れない」

と、フラン……フランドールを諫める。見た目相応といつか、実際に無邪氣である。中身真っ黒だけど。

「で、フランは何がしたいのよ。あ、決闘はなしで」

「え？ ジャあ、トランプとか」

トランプか。三人だと人数足りないから門番も呼ばうか。

「ユリリアもそれでいい？」

「……まあ、いいわ。暇がつぶせるならそれで」

と、こうしてトランプとこきましょ。

「……酷すぎるやしませんか？」

「それ」

中華門番、紅美凜が嘆く。

現在大富豪を行つてゐるが、まあ、イカサマ勝負である。

レミリアは能力で確率とか偶然とか操れるし、フランドールは手癖が悪い。私も似たようなもの。

対し美凜は実直というか、そういうことをしない。接待的な面もあるのだろうが、非常に正直なプレイである。ぶっちゃけ力モ。

「……。それで、美凜は負けたら何をするんだ？」

唐突に口を開いたのはレミリア。美凜があれこれ悩んでいる姿に思つところがあつたのだろうか。

「……へ？」

「ただの遊びではつまらないだろ？？」

「そうだねー。罰ゲーム決めとかないと」

レミリアにフランが同調。罰ゲームつて……ただのいじめじゃないの？ 部下いびり？

「……れ、レミリア様たちはどうするんです？」

「俺か？ 負けることはまずないだろ？ が、そうだな。この館にあるものならくれてやるよ。美凜なら、休暇でもいいしな」

「じゃあ、ぼくはお人形あげる。495年前からあるお人形」

怖いよ。フランドール怖いよそれ。

ちなみに負けの基準は最下位である」とらじこ。勝者は一位の者。「私は……どうしよう。べろちゅーとか

いつたら二者とも噴出した。美凜はともかくとして、悪魔がその反応をするのはどうなのよ。

ちなみにファーストキス。やつたね野郎ども！

「冗談は置いといてハグでいい？ 見た目だけは美少女だからそれなりに役得だと思うよ」

スタイルもいいよ。中身が残念だけだね。

「……夜月、あんまりそういうこと言わないよつ」

「そういうのは大切な人としかやつちゃ駄目だよ！」

おいなんだ。悪魔がどうしてそんな真面な価値観を持ち合わせて

い。

普通逆だと思つただけだなあ……。そして美凜は赤くなりすぎじやないかしら。

「それで、美凜はびづかむんだ?」

「あー……えっと、マッサージで勘弁してください」

無難である。というか、私が勝つて美凜負けたら美凜役得じゃない?

見た田美少女の体を触れるんだから。まあ、黙つておけばいいが。いざとなつたら勝たなくてもいいんだし。

結果としては美凜の敗北、私の勝利になつていた。

「ミスした……!」

「夜月、ちゃんと本氣でやらないきやダメだよ?」

「俺の目を誤魔化そくなど十年早い」

「…………あれ? イカサマしてました?」

## トランプ（後書き）

なんか、アレ。主人公の容姿は各自で連想してください。

キーワードは 美少女 スタイル良し 黒髪 で。

## おしゃべり

「マッサージはまた今度にして、朔夜に神社まで運んでもらひ。時間がかかるから楽である。時間が操れるつていいね。「ところでさ、抱えるとき、尻に手をやるのはなして?」

「パンツ見えますよ? 膝で抱えると」

いやまあ、別に見えても構わないんだけど。

触られたりとかは勘弁してほしいけど、見るくらいなら、ねえ。

それに下着だし。隠すためのものだし。

局所を隠すためのものを見られて怒るなんてことはしないよ。私は

「…………」

「あ、何よその田」

「一個人の立場から言わせてもらひナビ

「はい、なんでしょう」

「男が女を抱えてるとき、女のパンツが丸見えになつてたらどう思つ?

「…………羞恥プレイ?」

はあ、とため息。酷い反応だ。

でもまあ、白い田で見られるることは確かでしううね。

「そこまで理解できたらそういうことこわないよう」

「善処します」

それがきちんと反映されるかどうかはわからないけどね!..

神社につき、そのまま帰らせるのも悪いからお茶を出す。  
私が客人として朔夜を招いているので、敬語はなしである。

「零無は?」

「異変解決」

湯呑みを一つ置いてから二つに入り、中央に置いてあるみかんに手を伸ばす。

手早く剥いて、一粒口に入れる。程よい甘みと酸味が口に広がり、幸せな気分に浸る。

「……好きだね。みかん」

「果物全般好きだよ」

最上位はイチゴ。メロンとスイカは果物とは認めません。当然だけど。

「それで、朔夜は行かないの？」 異変解決

「まあね。零無が行つたんなら、今日中には終わるだらう」

零無の本業だしね。 異変解決は。

「それに、一人の相手もあるしね」

「……そういうや、朔夜つてこいつ」 から真面目になつたの？

「最初から真面目だけど？」

「いやそうでなくて。真面目に仕事し始めたっていつか、心をレミリアの下に置き始めたっていうか

「ああ……」

実は朔夜、レミリアに忠誠心を抱くようになったのは最近のことである。

去年の夏、レミリアが異変を起こし零無が解決したころから、忠誠を誓い始めたとうわさで聞いたけど。

「最近だよ。最近、こここの妖怪がそれほど恐れるものではないってわかった」

「そりやよかつた。さらに踏み入つて聞くけど、なんで執事なんてやつてんの？」

「なんでつて……。特に、仕事がないからね。外の世界にも居場所はないし」

「居場所がない？」 朔夜つて忘れられて幻想入りしたんだろうか。

どつちかつていうと自分から入つてくるタイプだと思つてたんだ

けど。

「いや、自分から来たよ？」ここには、自分の意志で侵入した。まあ、追われてたってか、捨て駒扱いだったのは認めるけど」

「捨て駒？なんかやつてたの？」

「ヴァンパイアハンター」

「わあお。それはつまり、レミリアを狩りに来たってことか。それで、負けて情けをかけられたと」

「屈辱的なことにね。それで、今に至るのさ」

「へえ。でも、逃げようと思えば逃げれたんじゃないの？ 能力あるんだし」

「そんな情けないことできるわけないだろ？」「

そんな理由で……。男らしいというか、なんというか。

まあ、本人が納得してるならいいか。部外者の私が口を出す」と  
でもないだろ？」

「レミリアにはどんな風に負けたの？」

「ナイフで刺そうとして時止め解除したら吹き飛ばされた」

「うわ。さすが妖怪。身体能力が段違いだね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3038ba/>

---

東方反幻想

2012年1月10日21時45分発行